

浄土の問題

和田昌太郎

浄土とは如何なるものであるか、というこの問題は、また、これが、私に、如何なる意義を持つものであろうか、ということでもなければならぬ。屢々、論ずる如く、所謂、「宗教経験の反省的自己理解」ということが、ここでも、その方法というものでなければならぬ。浄土の問題は、言わば、切なる私の安心の問題——さとりの道というものであり、学的立場として、また、私の『大乘佛教學』の問題と異なるものでなければならぬ。

私に、浄土が問題となるということは、その眞実性ということではない。

○浄土思想の問題としての『佛教に於ける浄土教理の發達』
 （大拙博士、一九二五年）は、ここに無関係とは考えられない。

○浄土—浄土教についての問題

人が、眞実に考へるとき、その立場を異にするとはいへ、何人もその関心なき能わず、と思われ、この、いわば、次元を異にする浄土の問題——それが関わりは如何なるものであろうか。

（試みに）—— 1、信仰的立場 2、近代知性的立場

3、学問的立場

◎

○何れも本来、相通するものと思われるが。その解明への、それぞれの努力、方法として

1、所謂、宗学的立場——真宗学——（教化の問題をも含めて）

2、近代仏教学の立場

3、仏教の眞理性」解明の立場

◎宮本博士『顯浄土眞實證文類講讀』の意義

4、論理「學」の立場、「即非の論理」、絶対矛盾的自己同一——思想の意義

《屢々、論ずる所であるが、学問は論理（—思想）というものでなければならぬ。眞の論理は眞実の自覚—所謂、無自覚の自覚（私即非私、是名私。仏即非仏、是名仏。一不二、「即非の論理」というものでなければならぬ。親鸞の「眞實信心必具」名號）は、眞実の自覚—仏凡不二、帰本願の経験—というものでなければならぬ。それは、また「私」の自覚というものでなければならぬ。》

「億劫相別、而須臾不離、盡日相對、而刹那不對」（大燈）。彼岸の世界が、絶対に、逆對應する所、そこに、その意味があり、人間の願ひ（祈り）と云うものも、そこにあるといわなければならぬ。人間の自覚（所謂、無自覚の自覚）に於いて、所謂、人間がその成立の根源に於て自己矛盾的である、ということが、上に、「逆對應する」所以であると言わなければならぬ。学者の所謂、「場所的論理」によつてのみ、宗教的世界と云ふものが考へられる」と言われる所以でなければならぬ。言葉を換えて、再び、浄土とは如何なるものであるか。それは浄土と此土との關係というものでなければ

ならない。試言して、浄土は浄土にして此土であり、此土は此土にして浄土である、と云うことが、両者の関係と云うものでなければならぬ(所謂、「浄土と娑婆との聯貫性或は一如性」)。両者は、事実として、所謂、「無礙道」と言わなければならぬ。所謂、「横超」の経験と言わなければならぬ。そこには、名号の自覚というものがなければならぬ。「彌陀の名號は浄土と穢土とを非連続的に連續させる」と云うことでなければならぬ。(名号と浄土の問題)。

「誠知。悲哉愚禿鷲。沈没於愛欲廣海迷惑於名利太山不喜入定聚之數。不快近眞證之證。可恥可傷矣。」(『教行信證』、信卷)。そこには、自己の根源に還つて、その眞実(阿弥陀の本願)に目覚めしめられたる(他力)親鸞というものがなければならぬ。上にも言つた如く、それは、また我々の問題と云うものでなければならぬ。所謂、學問もそこからと云われる所以のものと言わなければならぬ(眞宗の眞実性の問題)。「よつこぶべきことをよつこばぬにて、いよ／＼往生は一定…(中略)…踊躍歡喜のこゝろもあり、いそぎ浄土へもまいりたくさふらはんには、煩惱のなきやらんと、あやしくさふらひなましと、云々。」(『歎異鈔』、第九章、摘要)と云うことは、斯かる親鸞に於ける、所謂、煩惱即菩提、不斷煩惱得涅槃の自覚と云うものでなければならぬ。

周知の如く、學問を越えて思想と考えられる、清淨滿之(先徳)のその人と思はれる、その眞実性として、わが大乗仏教思想史上の一つの問題と云わなければならぬ。彼の『わが信念』は固より、その「他力救済の念は、よく我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。我は実にこの念によりて、現に救済されつつあるを感ず(『他力の救済』)。そこにも、浄土の問題(浄

穢即非)が窺知され得るものと言わなければならぬ。

寸心博士の(國家論)(『哲學論文集』、第七)について——浄土の本質に関するが故に、強ち無意味とは思われないこと

眞の國家が、此土に於て浄土を映すものでなければならぬ、といふことは、浄土と娑婆との問題が現實的課題といふことであり、所謂、大拙博士の『日本の靈性的自覺』『靈性的日本の建設』の問題、といわなければならぬ。

以上の拙論について——この研究の意圖する所(略示)

宗教經驗の反省的自己理解からの「浄土」の問題解明(試論)
なお、「眞宗」の仏教であるということ

——私の「大乗佛敎學」の問題

(余論—愚考メモ)所謂、現当二世の利益(住正定聚—この世の信心、必至滅度—かの土のさと)について

親鸞の立場が、人間(煩惱即菩提の煩惱)の立場に立つ処に、その理由を見出したいと云うこと(「如来とひとし」——「念須臾傾速疾超證無上眞道。故曰横超也」)。

○後記(註記を特に省略する。(『浄土系思想論』(大拙博士)に因り、思索した。博士の思想の、その方面について)の研究の一端と言おうか。意義なしとしないかの感がある。(眞宗講師、宮本正尊博士、『顯浄土眞實證文類講讀』の縁を得て、『教行信證』の深義の端緒に触れ得たことを喜びとする。學恩と言ひべきものであらう。殊に、その『眞宗の仏敎學的課題』ともいふべきものは、私の上記と勘校して、私の「大乗佛敎學」の問題でもあるので、得る処大であつた。(なお、寧ろ無學の憾を深くする。私の「浄土論」は、却つて今からと言わなければならぬ。